

『随想録』より抜粋

43

化土往生

前節の真仮の分際が明瞭でありさえすれば、結果の報化二土は判然分別が出来るのだ。

教える人が初めから第十八願を戴いたと自惚れているから、方便におりながら方便が判らないのだ。だから真実と申うて教えているけれども真実に成っていないのだ。

聞く人も初めから十八願の機の積りで聞いているから、合点すれば皆報土往生のように申っているのだ。しかし和讃には、

報の浄土の往生は

おほからずとぞあらわせる

化土にうまるる衆生をば

すくなからずとおしへたり

報土ほうどの信者しんじやはおほからず

化土けどの行者ぎやうじやはかずおほし

自力じりきの菩提ぼだいかなはねば

久遠劫くおんごうより流転るてんせり

真仏土しんぶつどかん卷には

仮けの仏土ぶつどとは、下しもにありて知るべし。すでにもつて真仮しんけみなこれ大悲だいひの願海がんかいに酬報しゅうほうせり。

ゆえに知んぬ、報仏土ほうぶつどなりといふことを。まことに仮けの仏土ぶつどの業因ごういん千差せんじやなれば、土ども復千差またせんじやなるべし。これを方便化身ほうべんけしん・化土けどと名づく。真仮しんけを知らざるによりて、如来にょらい広くわう大だいの恩徳おんとくを迷失めいしつす。

と、報化ほうけを知らないのは真仮しんけを知らないのだ。机上きじやうの空論くわうろんで知るのではない。実地じつちの信念しんねんの上に真仮しんけの区別くべつがついていないから報化ほうけの往生おうじやうの深義じんぎも判わからないのだ。

凡夫ぼんぶが化土けど往生おうじやうが望のぞめるものかいと言いっているが、化土けどさえ望のぞめない位くらいの者ものが猶更なほさら報土ほうどが

望めるものかい。報土往生は他力だから易い、化土往生は自力だから難しい、と平気で言っているが、前にあげた御和讃を何と見らるる。

如来は他力不思議の境地に入る者の稀なのを歎き給いて、方便を以て調機誘引して真実の願海に融入しめんが為ではなかったか。方便が難しくして真実が易いと言えば、何を好んで親様は難しい方便を説かれたか、了解に苦しむぞ。重ねて言う。

報土の信者はおほからず、報の浄土の往生はおほからずとぞあらわせる。

化土の行者はかずおおし、化土にうまるる衆生はすくなからずとおしへたり

道俗よ、君達の考えは根本から間違っつてはいないか。他力他力と向こうに眺めている他力

では助からないぞ。他力不思議の身に成ったか。難中の難を突破さされた人でなければ、あら心得やすは諦得できないのだ。

報化の往生は結果だから原因を具説しよう。正信偈に

専修執心判浅深

報化二土正弁立

専修の執心は浅深を判じ、報化の二土正しく弁立せりとは、専修と雑修の信心の深いと浅いとこの区別があるから、結果に於いて報土と化土との差別が出来るのだ、と教えられたのであつて、雑修の人は地獄に墮ちると教えられたのではないぞ。

専修とは、一向専修の他力もあれば、五専各修の自力もあるが、ここでは信楽開発せしめられた、修すれども行ずれども三業悉く信海流出の称名に随伴する一向専修を指して深心と判じ、報土得証を讃じ、雑修とは、

助正ならべて修するをば

すなはち雑修となづけたり

一心を得ざるひとなれば

仏恩報ずるころなし

仏号むねと修すれども

現世をいのる行者をば

これも雑修となづけてぞ

千中無一ときらはるる

と仰せられてあるが、真宗の道俗よ、雑修の域を一步も離れてはいないではないか。名号を称えながら助業を以て助太刀をさし、称名しながら定散に心は奪われ、称名憶念しながら幸福を祈る心がやまず、君達は雑修と知らずに雑修を修しておるのだ。その結果が化土往生なのだ。

凡夫が化土に行かるるものかと平気で言っているが、それなら誰が化土往生さして戴くのだ。それは御和讃にあるように

罪福ふかく信じつつ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆえに

方便化土にとまるなり

と仰せられて、疑心の善人が化土に往生するので、疑心の悪人たる我々は化土にも往生が
できない。自力の善根を励む人々が化土であって我々は影除きも出来ない。何を仰る、それ
なら自力の善根を励む人が化土往生が出来て、他力の名号に向いている者は、皆報土往生と
思っておられるのか。それは終南、吉水の正行専修（第十八願）雑行雑修（第十九願）
の教え方であって、専修雑心（第二十願）の者は一体どうなるのだ。法体の尊号に向きなが
ら、雑修の気持ちの除かない者は何処に往生するのだ。これが吉水門下の濁流であつたの
を、念仏為本から信心為本に浄化されたのではないか。

真宗の道俗の九分九厘までは、専修雑心の第二十願の桁にいるのだ。諸善万行の自力の
諸行を離れて、善本徳本の名号を修習しているけれども、定散の機執を離れ切らない為に、
法を仰げば往生は一定、機を見れば往生は不定、若存若亡の桁にいるのだから報土は決し
て望まれないのだ。その人は何処へ行くのだ。疑心の悪人なるが故に墮獄するか、墮獄する

とすれば、無宗教の人と同じ処へ行くか、それなら真宗の道俗は九分九厘地獄行きぞ、それでよいか。

御和讃のように、疑心の善人が方便化土に止まるので、疑心の悪人は化土までも行けないのだ、と言わるるかも知れないが、あの疑心の善人と言われたのは、君達を指してあるのだ。何故かと言えば「罪福深く信じつつ」は罪は恐ろしいから出さないようにし、福は有難いから励もうとする。悪い心を出さないようにして有難い信心を戴こうと言う心を以て、善本徳本の名号を称える人は、疑心の善人と名づけられるので、その人が方便化土に生れるといわれたのだ。

君達は口でこそ悪人と言っているけれども自惚れ通しているから悪に醒めてはいないのだ。第十八願では、唯除逆謗が正所被の機であるけれども、そんな悪人とは思っていないではないか。初めから素直な柄と自惚れて、宿善が厚いから早く戴いたと済んだ積りで聞い

ており、悪い心が出るとこの者をお助け、この者をお救いと、包む稽古をして有難がついてるのだから、悪を包んで有難がるのが疑心の善人ではないか。親様の御見抜きは、身動きならぬ業の持主を無条件で撰取すると願行を成就してあるのに、悪を出さないようにして有難うなつてと力むのが疑心自力であり、素直な柄と自惚れているのが善人ではないか。その疑心の善人の君達でさえも化土往生が出来るのだから、身動きならぬ悪人が化土に行かれぬ筈がないではないか。

何故かと言え、弥陀の本願の第十九願の自力の善根を励んでさえも双樹林下の往生をして化土往生と言われているではないか。一歩進んだのが第二十願の善本徳本の名号に眼が付き法頓根漸で育てられて難思往生を遂げさし、遂に第十八願海に帰せしめて難思議往生せしむる為ではないか。

して見れば 自力の善根を自力の心で修する十九願の行者でさえも化土往生が出来るの

に、それを不可少善根と捨てて、多善根多福德の名号に帰して念仏する二十願の行者が墮獄するはずがないではないか。この桁が名号法は他力でも定散の機執が去らないから、他力の中の自力と言われているのではないか。

僧侶よ、君達は学校で習っているではないか。機法俱漸の第十九願を去ったけれども、機法俱頓の第十八願海には融入しきらず、法頓機漸の第二十願の有る事を知っているではないか。自力の善根を植えた人間が化土に生れられるのに、他力の名号までふみ込んだ人が空しく流転するとすれば、弥陀の調機誘引は水泡に帰するがよいか。又自分で励む善根なら化土までも行かれるが、仏より給わる名号を聞き損ずれば流転するとすれば、自分の勤める善根よりは仏の廻向の善根は軽いとするか。反省しなければならぬぞ。

真宗の道俗の大部分は疑心の善人なのだ。口では悪人と言いながら邪見憍慢の親玉なのだ。それが法の鏡に照らさるれば照らさるる程悪性が見せつけられてくるので、第十八願

に開発ささるる迄は 逆謗の屍が自分であると言う事が自覚されないのだ。だからその途中
で死んだ者は皆化土往生なのだ。原因から言えば雑修の域を離れ切らず、結果から言えば
化土往生なのだ。凡夫が化土に行かれるものかい。化土までも行かれない者がその先の報土
往生が望めるものかい。

報土は他力だから親様の働きで行かるのだ。直に他力不思議に生かされる人が稀なから、
自力の中の自力から他力の中の自力なりに育て上げ、最後に他力の中の他力なりに融入する
が目的ではないか。今君達は他力の中の自力に腰を据えているのだ。それが地獄に堕ちたと
すれば仏力の腕前はゼロになるぞ。凡夫の機から言えば化土も報土も、影のぞきも出来る柄
ではないのだ。それを育て上げるのが調熟の光明だ。途中で倒れたら皆化土だ。次に開発さ
されてこそ報土往生なのだ。

人々よ、法門の筋道を正しく知らして戴いて 雑修の桁でうろついてはならないぞ。

いまは満足させられてこそ専修の行者と言えるのだ。原因に専雑の区別が出来ているから結果に報化の差別があるのだ。宜しく我執を以て法門を搔乱してはならないぞ。機執に閉ざされて大道を見失うてはならないぞ。